



まちてくギャラリー

東和町
土沢商店街
での日常

17

2016年5月～7月

花巻市東和町の商店街に紛れ込むように美術が点在しています。それが「まちてくギャラリー」です。

玉 征夫

高島 芳幸



「まちてくギャラリー」 #17
2016年5月、6月、7月の展示
高島芳幸・玉征夫
花巻市東和町土沢商店街22カ所
発行 東和町土沢商店会連絡会 2016年7月10日

企画・編集 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬14-120
代表 菅沼 緑
roqu@me.com





「まちてくギャラリー」は花巻市東和町土沢の商店街22ヶ所に作品の写真を3カ月毎に展示しています。

地図の赤い丸で示したおおよその位置に掛けています。

「街かど美術館」は特別で非日常のイベントでしたが、365日いつでも見ることができる「日常の美術」としてこの展示を考えました。

いつでもそこにあるということは、ともしれば見落としてしまうような、ささいな出来事でもあります。そのささいなことこそが、実は大事なことだと思ふのです。

しかし、ここに展示されている美術はささいなことの中に大きな気付きを隠していることでもあるのです。

官能の花園

ああでもないこうでもない、書いては消してで、もはやひと月が過ぎ去り6月も半ばになってしまいました。それでも、何とか今月中に印刷へ回そうと考えています。

左の写真は②番の展示にお借りしている「きのこやおいよ」の外壁です。壁の前にはコンクリートを切り抜いた植え込みがつくられて、この写真のようにノイバラの蔓が這わせてあったり、百合の茎も大きく伸びていました。この回の展示が終わる頃には大きな百合の花が乱れ咲く、官能の花園になっているでしょう。

下の写真の5月の展示時の写真では、まだノイバラにつぼみも見えませんが、たちまち茎は太り、蔓は伸び植物の生長の勢いというものはいつも驚異的な力さえ感じさせられ、おのきます。これももし、化学的に合成しようとすれば、どれくらいのエネルギーと装

置が必要になるのか、考えるだけで気が遠くなります。実験も計算もしたことはありませんが、膨大な装置が必要になるのではないのでしょうか。

それを植物たちは、常温、常圧のもと、太陽の光線と炭酸ガスや地中から得る栄養分で反応をおこし、つくり出す。もしや発熱しているんじゃないかと、触って見たこともあります、なんともありませんでした。これぞ生命のみなものです。

店の主人の及川さんは、山に入って山菜やキノコを採る趣味が高じてこの店を出しています。秋になれば全国からマツタケの注文が、ネットを通じて殺到しているようです。(http://kinokoya-oiyo.com)

そして、建物の大家さんでもある、動物学者の今泉さんは裏の山



からここまでの、リスの通り道をしつらえるべく、さまざまな工夫をしかけており、ここがその舞台、アウトプットにもなっているわけです。

しかるべく、この店先は、植物、動物と人との接点として、このノイバラの蔓のごとく絡み合っているわけです。

動植物たちの日々の変化は、自分たちの体の奥深くに組み込まれた、遺伝子が展開する成長のドラマを淡々と演じているだけなのです。

この写真による作品展示も遺伝子による生の展開に「想像という官能」が加わって、人間独自のドラマです。

不可能だらけのぼくたちの矛盾がい

この5月27日、オバマが広島で、核兵器廃絶へ向けてのアピールとして世界へ向けて話をしました。政治家が理想を語って、それを人々、世界の国々に共感させることは、周到な準備と言葉の演出、さらに裏付けが伴わなければならないことだと、強く感じさせる出来事でした。アピールへの演出は、純度を高めたことを感じさせると同時に、錯覚をうみだし、「矛盾」を組成する大もとでもあります。

アメリカの大統領という大いなる幻想に裏打ちされた現実、核ミサイルの発射命令を出す暗号パスワードを取めたかばんを手を持った軍人が演説の間にも、そばに立つという、もう一方の現実を突きつけています。

その光景は、政治と理想というものの懐に隠し持たされ、常にある「矛盾」をあらかじめさまたげたのです。

人間が自然から遊離して、文明を手に入れることで社会に適応する意味の拡大を重ねて、何でもありの現代美術の表現は、逆に不自由になりました。技術を放棄して思想の表現を得たことが、自由を獲得したというのは、間口が広がったけれど、敷き居は高くなったという事です。

いわゆる「自由になった表現」の可能性は極端に先鋭化して、あらゆる要素を視野に入れて検証することを要求し始め、言葉で説明することすら難しくなりました。

特殊記号化された美術と、それを取り囲む社会が、文化に対しても「理想の演説」と、「暗号入りのかばん」を同時に受け入れざるを得なくなる「矛盾」を二律背反などといったり、アンビバレンスと気取っていつてみたところでのなんの解決になるのでしょうか。

ますますわからないことだらけは、自分の存在からはじまり、社会とのつながりも、「もの」とは、いったい何なのか、要素ばかりがどんどん増えます。一方で、科学の領域は未知に挑戦し続け、不可能をどんどん減らし続けています。(それが不可能も増やすことになる)

文明が高度化して、何もできないことがないくらいに、テクノロジーは人間の仕事を奪い取るまでになってきました。科学が人の細胞まで作り出し、ひょっとすれば不死も不可能ではないか、と思っくらいます。

しかし、一方で閉塞されたぼくたちの呼吸は、大気から酸素を奪い取られているかのように、不可能な精神を天文学的に増大し続けているように見えます。

だけど、そこにも、ここにもある「矛盾」こそがぼくたちを奮い立

という「生きる道」を選んだことの壮大な歴史。その道を歩くことによつて、「矛盾」が生じたのではないのでしょうか。

社会という幻想をより強固に確立して、自然と文明をわけたところから「矛盾」は深く沈殿したのです。よごんだ組成物を色のついた上澄みの下に、隠し持つようになったのです。それは「大いなる矛盾」ともいえるものです。

国家の指導者を権力者に祭り上げることで、「矛盾」をぼやかす隠れミノにすることや、「文明を前進」させるという政治の約束の嘘との「矛盾」。

ものの成り立ちを明らかにする手段のひとつだったはずの芸術が外面の形から、内面の意味を表現するようになって、表現の可能性が広がったと考えることもできるのでしようが、じつは逆に狭まったといったほうがいいのではないだろうかと思えるのです。

たせて、お尻をたたいているはずでもありません。

カサカサに乾いた社会という幻想に流され、逆らい、ケツパぐったつもりで、なんにも変わらないかといえば、見事にこんな現在という世界が現れているんじゃないか。摩訶不思議なぼくたちの現世で、飽くこともなく繰り返す想像が多様なのに、一様でもある。

ぼくたちの想像が世界を変えることができるか、どころかどんなにちっぽけな想像だろうと、それは要素になっているのです。

え？要素なんかじゃ意味がない、っていうか？

意味なんて関係がないじゃないか。そう思ったときにぼくの中で世界が変わる。

前も後ろや今とか、先のことなんて一切が想像をフラットにしてしまっただ。ただ、自分の命がここにあつて、それを生きているからほとんど自動的に想像が湧いてはきえる。その繰り返しでやるしかないんだと思うのです。

今回の作品写真を提供してくれた、高島芳幸さんと玉征夫さんにしても、その想像は形こそ大きく異なる表現ですが、ぼくたちが生き続ける上で繰り返す想像をすべてに託しているのだと思います。

ものすごく抽象的で訳のわからない、あいまいな言葉ですが、現実という幻想の中でつくり出した文明の「矛盾」の箱の中で想像をもてあそんでいるだけなのかもしれません。そういう現実を楽しむのか、嘆き悲しむのか。そういう選択しかないような気さえる現在、その選択が可能性を無限にもたらしめていいるのではないのでしょうか。



⑬ 福泉 前での展示

たかしま よしゆき

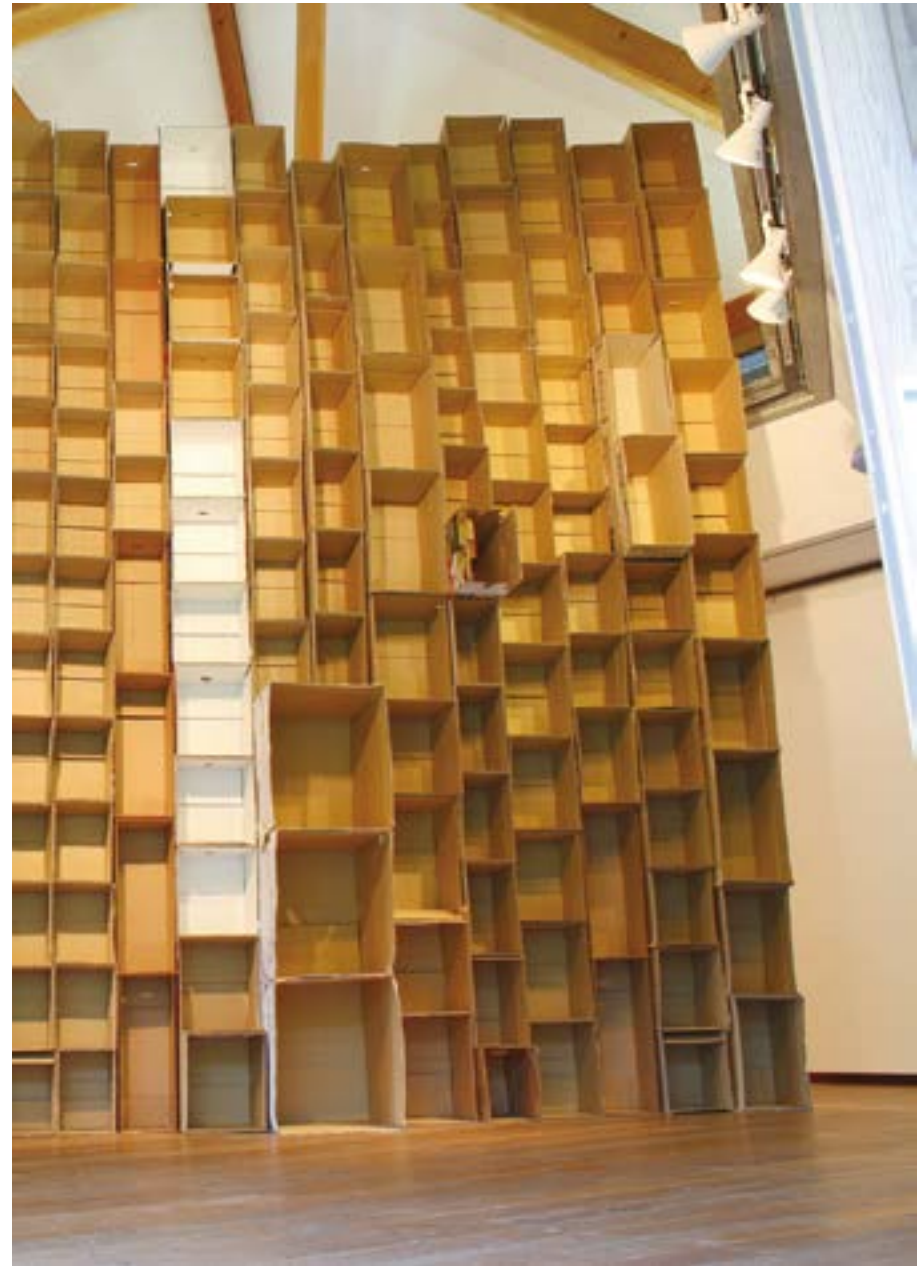
高島 芳幸



2015 高島芳幸展 『用意されている絵画 - シカクニフレルII』



2015 高島芳幸展 『用意されている絵画 - シカクニフレルII』



『中之条の壁』中之条ビエンナーレ 2009（中之条町で消費された段ボールの箱を積む）



アートミーティング 2009 関係 - 木と木との間を確認する



『この部屋の隅の』(2014) MDUS.ART PROJECT 5



中之条ビエンナーレ 2009『関係』 (映画『眠る男』で使われた山家を確認する)



⑤ 佐々長建材店 前での展示

た
ま
い
く
お

玉 征夫



『この部屋の隅の』 2014年 アルミ板・プリント



『そこはかの道』 2011年 キャンバス・油彩



『鳥の歌』 2004年 キャンバス・油彩



『2月の鳥』 2003年 キャンバス・油彩